

* 読者からの反響270件超

きしむ 親子

離婚を巡る子どもの苦悩に耳を傾け、支援のあり方を模索した連載「きしむ親子」(10月22〜29日朝刊掲載)に対し、270件を超える反響がメールや手紙などで寄せられた。

■自分の経験語る

「つらいときは、布団の中で声を殺して泣いていた。今でも人が信じられな

てくれる人がそばにいてくれる。そんな支援が必要」と求めた。

埼玉県の30歳代前半の女性も「(同居した)父が母

親の離婚を経験した。生活苦で母親から「死のうか」と言われ、きょうだいで泣きながら「嫌だよ」と拒んだ経験を明かし、「心から信じられる人や親身になっ

てくれる人がそばにいてくれる。そんな支援が必要」と求めた。埼玉県の30歳代前半の女性も「(同居した)父が母の悪口を言うので、『母親がいなくて寂しい』と言えず、気持ちにふたをして生きてきた」と振り返り、「気持ち

を求めた。埼玉県の30歳代前半の女性も「(同居した)父が母の悪口を言うので、『母親がいなくて寂しい』と言えず、気持ちにふたをして生きてきた」と振り返り、「気持ち

■苦境の母子家庭

最も多かったのは、貧困にあえぐ母子家庭への支援を求めた意見だった。

「何のために生きているのか全くわからなくなる」とが多々ある。3人の子どもを一人で育てる大阪府の30歳代半ばの女性はメールで訴えた。裁判所で養育費の金額まで決めたのに、

離婚調停中の30歳代前半

の父親は、妻が2人の子どもを連れて家を出てから4か月以上がたつといい、「連れて行った者勝ちという現状が早く変わってほしい」と歯がゆさをにじませた。

2回目で紹介した国際離婚のケースでは、40歳代前半の元夫から「元妻に娘を連れ去られた苦しみを分か

代前半の女性は「子どもが養育費をもらうのは当たり前の権利」とし、「諸外国のように、国が(養育費を)立て替える制度を」と求めた。

■面会交流に賛否

子どもとの面会交流については、立場によって意見が大きく分かれた。

で娘を養育できるはずなのに、娘が日本にいた約4年間、ほとんど会えなかったという。

元夫と離婚後、4歳の娘と暮らす大阪市の30歳代後半の女性は、元夫の娘への暴力などを恐れ、娘と面会させないと決意。面会交流を促す民法改正に理解を示しつつも、「面会の支援体制がないまま法改正され、苦しんでいる人は多いのでは」と懸念した。

子供に寄り添う支援必要

養育費立て替える制度を